

火野葦平「王六郎」論

—『聊齋志異』「王六郎」との比較研究—

増田周子

はじめに

火野葦平には『聊齋志異』を元に改変し、再小説化した作品群がある。筆者が調査した限りでは、およそ、一〇作は判明している。『聊齋志異』とは、作者は、蒲松齡（一六四〇年～一七一五年 没年不詳）で、神仙、幽霊、狐狸の怪異譚を筆記し、まとめて書き記した中国文学である。中国でも長年にわたって親しまれ、日本では、江戸後期に伝えられたとされる。¹⁾

『聊齋志異』はその内容の面白さから、近世文学をはじめ近代文学の数多くの作家たちに親しまれ影響をもたらした。例えば、日本の近代作家たちの例をあげてみる。『東洋画報』（一九〇三年三月創刊）の編集責任者であった国木田独歩は『東洋画報』に『聊齋志異』を翻訳した。そして後に、国木田独歩

と蒲原有明の『聊齋志異』訳を収めた『支那奇談集一〜三編』（一九〇六年四月、近事画報社刊）を發刊した。芥川龍之介も、『聊齋志異』をもじった「椒岡志異」と題するノートを持っていたし、『聊齋志異』の「酒虫」を典拠として「酒虫」（『新思潮』一九一六年六月）を著した。また、佐藤春夫も『玉簪花』の中に収録した「緑衣の少女」「恋するもの道」「碧色の菊」など、『聊齋志異』を典拠とした作品を数多く残している。太宰治「竹青」（『文藝』一九四五年四月）も『聊齋志異』の「竹青」を典拠としてアレンジしたものである。その他、太宰は「清貧譚」（『新潮』一九四〇年一月）など『聊齋志異』に材をとった作品を残している。

これら『聊齋志異』に魅せられた芥川龍之介、国木田独歩、佐藤春夫らを尊敬し愛読した火野も『聊齋志異』に親しみ、「中

国艶笑風流譚』をはじめとする、数々の『聊齋志異』改変作品書を著した。

だが、戦争文学作家として世に知られた火野の『聊齋志異』関連作品は、残念ながらほとんど研究されてこなかった。ただ火野の『聊齋志異』改変物は、決して軽く書かれたものではない。一見、男女の恋物語や、妖怪談を描いているかのように見えながら、作品には、戦争の反省や、戦後のGHQ占領への批判、未来に向けての人間のあるべき姿などを暗喩として描いた貴重なテーマが内包されている。それゆえ、火野文学を考えるうえで重要な位置を占め、注目する必要がある。

そこで本稿では、火野の『聊齋志異』改変物から、「王六郎」をとりあげる。火野の「王六郎」とその典拠『聊齋志異』の「王六郎」を比較検討し、どのような改変を火野が施したのか、そして、作品に込められたテーマはどうか、詳しく述べていきたい。

一 「王六郎」の成立と「創作ノート」

「王六郎」は、『別冊小説新潮』（一九四九年一〇月一五日）に向井潤吉の挿画で発表された。その後、次の五冊の作品集に

収録されている。

『中国艶笑風流譚』（一九五一年一月一〇日、東京文庫）

『東洋艶笑滑稽聚』（一九五二年五月三〇日、東京文庫）

『美女と妖怪―私版 聊齋志異』（一九五五年七月一日、学風書院）

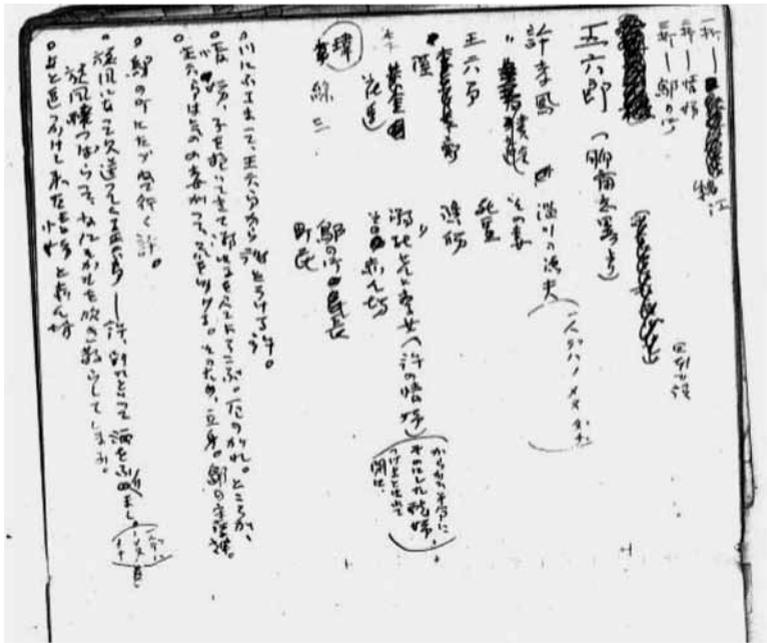
『中国艶笑風流譚』（一九五六年二月一〇日、学風書院）

『中国艶笑物語―私版 聊齋志異』（一九五六年三月五日、河出書房）

多少、句読点などが削除されたり加わったりしているが初出「王六郎」と五冊の収録本は、ほとんど変化がなく、火野は収録にあたって大幅な書き換えなどはおこなっていない。また、火野の「王六郎」には、北九州市立文学館に「創作ノート」が残っている。その部分をあげて翻刻してみる。この「創作ノート」は、火野が王六郎を執筆する前に重要点を記したノートである。

一折 魏江

二折 情婦



三折 鄜の町 四折小段

王六郎（聊齋志異より）

許孝風 溜川の漁夫（一人デハノメヌタチ）

許黄英 その妻

王六郎 死霊

陸鄭 漁師

李花蓮 溺死せんとする女（許の情婦）（からかひ半分にもものにした情婦。つけまとはれて閉口。）

その赤ん坊

瑋線三 鄜の町の民長

町民

○川にふ里まいて、王六郎から謝を受ける許。

○情婦、子を抱いてきて溺れるを見てよろこぶ。厄のがれ。ところが、

○王六郎は気の毒がつて、それを助ける。そのため、立身。鄜の守護神。

○鄜の町にたづねて行く許。

○旋風になつて吹送ってくる王六郎——許、別れといつて酒をふりまく。（一人デハノメヌタチ）

旋風酔つぱらつて、なにかかもを吹き散らしてしまふ。

○あと追っかけて来た情婦と赤ん坊

以上が「創作ノート」である。詳しくは後述するが、『聊齋志異』にはなかつた、漁師許の愛人李花蓮を創作しようとしていた様子や、「旋風酔つぱらつて、なにもかもを吹き散らしてしまふ。」という、火野の「王六郎」のラストの構想が執筆前からあったことがわかる。

二、火野葦平が「王六郎」を書く際に参考にした『聊齋志異』

さて、「王六郎」を考察する前に、火野がどのようにして『聊齋志異』を知ったのか、そして、どんな『聊齋志異』を読んだのかを整理しておきたい。火野は、『美女と妖怪―私版 聊齋志異』の「あとがき」で、

早稲田文科時代、私は杜小陵と李太白との詩に惹かれて、自分も漢詩をつくつたりしたことがあつた。私のやうな浅学な者はたちまちそのむつかしさに辟易してやめてしまつたが、それがきっかけとなつて、両詩人の唐本詩集とならべて、商務印書館版の「古今奇観」や「聊齋志異」を机上

におくやうになつた。そして、それを漢和辞典をひきながら熱心に読み、興趣のつきざるものをおぼえた^③

と記している。火野は早稲田文科時代の一九二〇年代に、漢詩を愛読し、自らも漢詩を作つたり、中国文学に親しんでいた。そして辞書を引きながら、漢文の『聊齋志異』を読んでいたのであつた。火野は、さらに続けて『聊齋志異』の「むつかしさに面倒くさくなつて投げだしてしまつた。それから、後年、柴田天馬氏の名訳が出るにいたつて、さらに往年の感動を新にしたのである。柴田氏の訳文は原語をたくみに生かした実に気のないもので、その親切な註解とともに、昔、中途半端にしか読んでゐなかつた私をすこぶる満足させてくれた」という。ここで火野が述べる商務印書館版発行の『聊齋志異』は、火野の通つた早稲田大学の図書館ならびに国立国会図書館に所蔵されている。これは、一九二五年以前の発行のものと考えられる^④。つまり、火野は、この商務印書館版発行の『聊齋志異』を読んだ可能性が高い。だが火野は、難しさに辟易し、原文で読むとはあきらめ、柴田天馬訳で『聊齋志異』に親しんだのであつた。ちなみにこの上海商務印書館版の『聊齋志異』には、「王六郎」が掲載されている。

さて、火野が、『聊齋志異』改変物を書く以前に柴田天馬訳の『聊齋志異』は、一九一九年一〇月に玄文社から、一九二六年三月には、第一書房より刊行されている。また、柴田天馬訳は一九三三年にも第一書房から発刊されている。火野が何を手元に置いていたのか、蔵書記録が残っていないことと、戦前に文学廃業宣言を火野自身が行い、売却したこともあり不明であるが、火野はこれらの柴田天馬訳を読んだのであろう。ただ、柴田天馬訳の『聊齋志異』の一九一九年の玄文社版、一九二六年、一九三三年の第一書房版、いずれにも「王六郎」は収載されていない。

さらに、火野は、「終戦後は、北京からかへつてきた村上知行氏の訳が出版された。これはまた原文を思ひきつてくたいてしまつた平易な文章で、柴田氏とは、別個の味はひがあつた」と記している。火野が「王六郎」を発表するまでに、村上知行訳『聊齋志異』は、一九四七年一二月に光文社から『聊齋志異香艶抄』、一九四九年五月に村上知行訳『もんだんらいぶらりい聊齋志異上巻』（東西出版社）などが発刊されている。『聊齋志異香艶抄』には、「王六郎」は収載されていないが、『もんだんらいぶらりい聊齋志異上巻』には「王六郎」が収録されている。まとめると、おそらく、火野は、漢和辞典を引きつつ苦しみ

ながら一九二〇年代の上海商務印書館版『聊齋志異』『王六郎』を読み、後には村上知行訳で親しんだのであろう。

なお本稿では、火野作品「王六郎」は、『中国艶笑物語―私版聊齋志異』を、典拠『聊齋志異』『王六郎』は村上知行訳の『もんだんらいぶらりい聊齋志異上巻』をテキストとする。

三 火野葦平「王六郎」と『聊齋志異』『王六郎』

a 王六郎と許孝鳳の出会いと別れを打ち明けるまで

『聊齋志異』『王六郎』の王六郎と許孝鳳の出会いから別れを打ち明けるまでのシーンを簡単にまとめてみる。

淄川に許という漁師がいた。許は毎晩、河に出掛け、酒を飲みながら漁をした。ついでに溺れ死んだ者に与えるために河に酒を注いだ。すると、他の漁師が全然取れない場所でも、許だけは何故か魚がよく獲れた。ある晩のこと。許が河のほとりて酒を飲んでいたら、若者がやって来た。許はその若者に酒をすすめ一緒に飲んだ。網をかけていたが、その夜は、一匹の魚も釣れなかった。許がっかりしていると、若者は立ち上がり、「下流の方へまわつていつて、魚を追いあげてきましょうよ」と言ってくれた。すると魚がたくさんとれた。喜んでお礼を言い、許

は魚を贈ろうとしたが、若者はそれを受け取らずに、「いつもいつも好いお酒をこちそうになりつばなしでいるのですもの、何の、これしき、お礼にはおよびません」と断った。許は、初めて会ったのに若者がいつもと言うのが不思議だった。許が、若者に名を尋ねると王家の六男で王六郎だと述べた。その後、王六郎と許は毎日のように酒を飲みながら、二人で協力して漁をするようになった。王六郎が手伝ってくれるので、どんな時も大漁だった。以上が『聊齋志異』の話である。

一方火野葦平の「王六郎」は、壹折から五折に分かれているが、この部分は、壹折と二折の部分にあたる。内容としては、ほぼ同じである。ただ、主人公の許孝鳳の性格描写が火野の「王六郎」の方が詳しい。例えば許孝鳳は、「創作ノート」にあるように、「一人デハノメスタチ」に設定され、「酒と女とばくちを好む」「生来、怠惰で、不勉強で、依頼心ばかりつよい」「酒徒である。身を持ちくずしたほどであるから、耽酒、大酒、溺酒、乱酒、暴酒、淫酒、落酒、酒の害というものを経験してきた」とある。「嘘やごまかしのいえぬ好人物」とも書かれている。また、火野の「王六郎」では、筆者火野葦平の語り手が時々登場する。これは当然『聊齋志異』にはない。語り手は、許は酒好きではなく、酒飲みだと述べる。「酒飲みは、酒の肴に話

をするのではなく、話の肴に酒をする。これは筆者と同様である」とし、酒好きではないので、「一滴の酒も他人に飲ませまいといふ賤しさがないので、気前はよい」とも言う。

さらに、許孝鳳の女房の描写はかなり異なる。『聊齋志異』では妻と表記されているだけだが、火野の「王六郎」では、黄英と名前があり「角が十七本もあるような古女房」で「ヒステリー」と書かれている。許は、次のような様子だった。

胸の鬱を晴らすためには、ときに独酒もやる。許は、漁撈にでかけるときには、かならず若干の酒を用意した。それは、多分に洩れぬ憂さばらしだった。志を得ず、故郷に檻褸をかざったこと、郷里にあつても仲間はずれされたこと、貧乏と、女房の軽蔑と、ヒステリーとに悩まされていることなどで、許の日々は快々たるものだった。(8頁)

許は、嫌な妻を娶り、郷里でも仲間外れにされ、しょんぼりしていた。こんな、許の姿は『聊齋志異』には書かれない。また、火野の「王六郎」では、許の女房は、許が大量に魚を持って帰っても、「ふん、魏江の魚どもは、とんと間抜けで、おひとよしと見える。あんたのような薄はんやりの網にかかるなんて、お

おかた、盲目で、聲で、跛だろうよ」と罵倒する。罵倒しながら魚だけはそっくり取り上げるのである。それでも大量の魚を取ってくるので、妻も許の功績は認めないわけにはいかなかった。そのうち他の漁師たちも秘訣を教えてもらおうと訪ねてきた。が、「貪欲で、狡猾で、エゴイスト」の妻黄英は「あいつらに教えてやっちゃ、駄目だよ」と命令する。そのうちいつのまにか、「女房の六角形の顔も恵比須顔となり、酒も多く購えるようになった」。すると黄英は、「あんた、このごろ、ひどくうれしそうにしてなさるね」と「妙に猜疑ぶかい眼で、変ってきた夫を見た」。なぜなら、許は浮気をしていたのである。許が浮気するなどの描写は『聊齋志異』にはない。語り手は次のように記す。

貧乏人に恋愛はできないといえは、精神主義者の一喝があるにきまつているが、実際問題として、金がなくては女はつくれないということは、天下の掟である。ことに、最近のようなインフレ時代では、恋愛にたいへん金がかかる。したがって、恋愛が新興階級の専属品化して、頹廢ははてしもないのである。第一、女の方が金のない男には見むきもしないし、興味も感じない。(13頁)

この語り手の言葉を見ると、火野の「王六郎」がインフレ時代、すなわちこの作品が執筆された戦後まもなくの一九四九年頃を背景に描かれているのだと推定される。許には愛人の李花蓮がいた。李花蓮には、許との子供もいた。李花蓮は、「その名に似あわぬ醜女で、暗愚、執拗、猜疑、狂暴」で「許の懐をしほろうとする」。そのため、許は「いささかの外れた」。語り手は以下のように続ける。

許の方は当座の出来心で、あたかも急行列車が駅を通過するように、花蓮を三等駅の通過駅ときめていたのに、駅の方では、赤旗をふって、遮二無二そこへ停車させ、次の駅に行かせまいとする。燃料があるから動くのだからと、その燃料を取りあげようとする。(14頁)

この描写で興味深いのは「赤旗をふって」という部分である。赤旗、すなわち当時の共産主義がいかにも、自由を奪うものかを許と浮気相手李花蓮とのことで暗喩している。ソ連では、レーニンによる建国以来の一九二〇年代から肅清を行ってきたが、スターリン体制の一九三七年と翌三八年には、大肅清を行い、

ロシア連邦国立文書館にある統計資料によれば、134万4923人が即決裁判で有罪に処され、半数強の68万1692人が死刑判決を受けたとされる。同時期に山本懸蔵、杉本良吉らの、日本共産党員でソ連亡命者も肅清され殺された。このような思想的自由を奪う共産党の肅清の恐ろしさを、李花蓮や列車に見立てて批判的に書いている。李花蓮は「おかみさんに、暴してやる」と脅した。許の本妻黄英は「独占欲が強く、嫉妬の権化で、他に女をつくつたと知れたら、それこそ命にかかわることが起る」と許は李花蓮の「処置に困り、途方に暮れた」。このように、登場人物の心理過程が詳しく描かれるのも典拠『聊齋志異』『王六郎』と異なる点である。

b 王六郎と許孝鳳との別れ

ここで、続きの『聊齋志異』『王六郎』のストーリーを追ってみる。

半年たったある日王六郎が突然、許に別れを告げに来る。理由を聞くと、次のように言った。実は自分は酒に酔って溺れ死んだ亡霊で、酒をくれたお礼に今まで許が魚をとれるよう協力していた。明日には自分の罪業が減する。そして自分の身代わりが溺死するので、別の地域で人間として生まれかわる。だから

らもう会えなくなるとのことだった。許が酒を飲みながら身代わりはどんな人か尋ねると、明日昼頃河畔にやって来る女だと言った。翌日の昼に、許が河辺に行くと、子どもを抱いた一人の女がいた。子どもは河岸に投げられ、女は河に落ちてしまった。女は手足をばたばたさせて、浮いたり沈んだりしながらわんわん泣いていた。やがて全身ずぶ濡れになりながら、陸に倒れ込み、子どもを抱き上げて去って行った。日が暮れてから、許が相変わらずいつもの場所で漁をしていると、王六郎がやって来て、許に、「またいつものようにお会いすることができませんよ」と言う。どういう訳か聞くと、女の人が代わりに死ぬはずだったが、子どもを残すに忍びなく、私一人のために二人の命を奪うことはできないと思ったので、結局、女を救ったというのだった。許はそれを聞いて感心し「君の心は、すなわち仁人の心です。上帝の御心にまで通じる心です」と述べた。そうして、二人は今までと同様に、仲睦まじく一緒に酒を飲み、魚を捕って楽しんだ。数日後王六郎が来て、またもや別れることになったと告げる。その理由は、王六郎の親切心に天帝が感動し、招遠県鄔鎮の土地神の位を授けて下さったので、明日赴任するからだだった。そして遠い場所だがぜひ会いに来てほしいと述べた。以上が『聊齋志異』『王六郎』の続きである。

この部分は火野の「王六郎」の三折にあたる。『聊齋志異』では、見ず知らずの女が王六郎の身代わりとなる予定だった。だが、火野の「王六郎」では、誰か死ぬなら、王六郎の神通力で「うるさい李花蓮を川に溺れさせて、かたづけてもらいたい」と思ったとある。果たして、河にやってきた女は李花蓮であった。『聊齋志異』と同様、子供は岸に投げられた。李花蓮は、「真赤な濁流の渦のなかに巻きこまれた」が、王六郎に助けられる。許孝鳳は次のように思った。

「王六郎の嘘つき奴」腹立ちまぎれに、許は叫んだ。厄払いどころか、女がこの遭難で、また新しくなにかを要求してくるにちがいないと、齒軋りする思いで許は怨んだ。

(17頁)

火野の「王六郎」も、ストーリー展開は『聊齋志異』とほぼ一緒で、王六郎は、自分のために母子二人を犠牲にするのは悪いと思ひ、女を助けたのであった。『聊齋志異』と異なるのは、女は特定の人物、すなわち許の愛人、李花蓮であることだ。許は、煩わしくなった愛人に死んでもらいたいと身勝手な気持ちを抱くが、うまくいかなかったのである。ここにある「真赤な

濁流」に巻き込まれと言う部分は、先に指摘した共產党の赤にまみれた李花蓮の様相が感じられる表現だ。李花蓮が助かったため、許は、「幽霊の王六郎の神通力など、たかが知れていると、軽蔑の思いすら湧いた」。このあと、火野作品でも、天帝に、王六郎の優しい性質が評価されて、招遠県鄔鎮の土地神を命ぜられたのであった。王六郎は「神様に昇格しても、これまでの恩誼は忘れない」と「疾風に乗って」鄔鎮へと旅立った。

C 招遠県鄔鎮での王六郎と許孝鳳との出会い

本節でもまず先に『聊齋志異』「王六郎」の話をまとめていきたい。

妻が、遠いうえに、姿の見えない土地神と付き合うのは無理だと止めるのも聞かずに、許は招遠県鄔鎮までやってきた。王六郎は、姿は見えないが風のような感じで登場し、許が会いにきてくれたことを喜んだ。許は王六郎に土産の酒をかけた。自分の友人なので手厚く世話をせよと村人にお告げをしていた王六郎のおかげで、許は村人に囲まれ、接待を受け歓待された。土地の人が引き留めるので思いのほか長く滞在したが、やがて帰ることになった。鄔鎮の人々は、山ほどの饞別や贈り物を用意した。王六郎も、つむじ風のような姿で途中まで見送った。

許が、家に戻ると以前に比べ裕福になったので、漁師はやめた。土地神王六郎も村人の頼みに必ず応じてくれるので、霊験はあらたかだと信頼されていた。すなわち、許も王六郎も幸せになったのである。『聊齋志異』『王六郎』はハッピーエンドで終わる。

この部分は、火野作品『王六郎』の四折と五折の前半にあたる。『聊齋志異』『王六郎』とは異なり、火野の「王六郎」は次のように話がすすむ。許が、王六郎のいる招遠県鄆鎮に行ったのは、「友誼よりも、実は、一刻も淄川の町にいたくなかった」からであった。なぜなら「ヒステリーで強欲の女房と、死に損いの執拗な李花蓮との両方から逃れたかった」からである。許の女房は、大反対だったため、許は「女房に脅迫されるようにして、有金のほとんどを奪われ、無一文にちかいかい路銀を持って出発した」。許は「王六郎が、向うにいたら悪いようにしないといった言葉に、ただ、希望をつないだ」。語り手は次のように言う。

許が怠惰で不勉強で依存心のつよい男であったことは、魏江の漁撈ですでに証明されたが、依存心とて馬鹿にはならない。依存心は付和雷同、徒党の精神となつて、歴史をもうごかす大事業をなして来たことは、周知のとおりである。事大業から、やがてオポチュニズムになったこと

源由の素材性は、このとき、怠け者の漁夫許孝鳳をして、四百七十里の道程を踏破せしめたのである。(21頁)

火野の「王六郎」では、許はオポチュニスト、すなわち日和見主義者となっている。許も四百七十里の道程は苦しかったが、「彼を死から遮断したものは、偉大なオポチュニズムであった。」許を支えたのは「王六郎の庇護が、かならず再生の道をひらくという依存心」である。あまりの苦しさの中、迎えにも来てくれない王六郎を恨むが、村人にお待ちしていましたと欲待されると「ひとたびは恨んだことを悔いた。」そして「空腹がおさえきれず、恥も外聞も忘れて、食べ物に飛びついた」。語り手は、こんな許を見て「オポチュニストは喜怒哀楽も簡明である」「忍耐こそは人間の最大の価値であると、この欲深漁師は、鹿爪らしく自得するところがあった」と述べる。

火野の「王六郎」での描写は、戦時中のことが暗喩されていると考えられる。火野は、戦後一九四八年五月二五日から、一九五〇年一月三日まで公職追放された。火野は公職追放中の時期について次のような言葉を残している。

終戦直後、私は追放をうけて、しばらくペンをしばらく

いた時期があつた。執筆禁止ではなかつたが、内容を制約されたため、私は窮して、救いを「聊齋志異」に求めた。そして、柴田氏版を参酌しながら、自分流に勝手に書きあらためた「私版聊齋志異」物語を時折ものにした。⁽⁸⁾

四、「聊齋志異」「王六郎」から大幅に変更された火野葦平「王六郎」

すなわち、『聊齋志異』改変作品「王六郎」は、戦後、まもなくの公職追放中に描かれたのである。公職追放を火野が受けるのは、火野の一部の作品が「日本民族の優越感を強調し、戦争、特に太平洋戦争を是認し、戦意の昂揚に努めて居り、その影響は広汎且つ多大であつた。以上の理由により、同人は軍国主義に迎合して、その宣伝に協力した者と認めざるを得ない。」⁽⁹⁾ということであつた。つまり、公職追放中は、火野が戦争について否応なく振り返り、反省させられた時期である。その時に『聊齋志異』改変作品は書かれているため、随所に戦争と関連した内容がしばしばあらわれるのだ。許が飢えながらも四百七里もの苦しい道程を耐え抜き、前進する姿は、まさに兵士の行軍に重なるところがある。兵士たちは、許のように、「忍耐こそは人間の最大の価値である」と教えられていた。そしてそれを忠実に守つたのである。兵士らは許のように自分の運命を呪うが、軍や政府の庇護が必ず道を開くという依存心を抱いていた

はずだ。この依存心の心は後で辛い報いを受ける。

さて、火野「王六郎」の五折後半、六折は典拠『聊齋志異』「王六郎」からの大幅な加筆がある。つまりもとの『聊齋志異』「王六郎」とは相当異なるストーリー展開となる。火野の創作部分には重要なテーマが隠されているので注意してみていきたい。

土地神となつた王六郎に出会えた許孝鳳は、「町民の下にもおかぬ歓待」で、「まるまると肥え太り、金銀は懐や袋にふくれあがつて、俄か大尽となつたといつてよかつた。朝から晩まで、招待の宴会すくめ、(中略)有頂天となつていた。」そして、

酒と、女と、ばくちと、そうして、その放埒のなかで、ようやく、町民の信用をうしないはじめたとき、許に狡猾な遁亡の企みが湧いた。(中略)どこか他の町に移ろうと計画した。(26頁)

神通力のある王六郎のいる土地では思うがままの勝手気ままが

しにくいので、別の土地に移り住もうと考え、王六郎に別れを告げた。『聊齋志異』「王六郎」では、許は招遠県鄆鎮で道楽放蕩などせずに別れを告げた後は真つすぐ家に帰った。妻も愛していたのである。一方、火野の「王六郎」では、放埒の限りを尽くしていた。そして許は、うるさく煩わしい妻と愛人のいる故郷へなど戻るはずはなかった。この部分は火野の創作である。町の人々も「土地神の親友で恩人の下品な漁師に失望するようになっていた」が、それでも土地神と縁故のある方だとして、たくさんの餞別の品を送った。

許孝風は新興成金のような凱旋ぶりである。許は途中どこかの町で、気に入った女（パンパン・ガールでもよい）の見つかった場所に腰を据えようと、心ひそかに、にたついていた。（26頁）

こんな不届きものの許の心はみすかされ、旅籠の主人も「どうぞ、あなたさまも、お元気で」と言ったが、「またお出でくださるようには、と、それまではどんな客にもいった別離のお世辞をいわなかった」。『聊齋志異』と同様に、王六郎はつむじ風のような姿で途中まで見送った。火野の「王六郎」は、そのあと

は大きく『聊齋志異』と異なる展開をみせる。これで許は、王六郎に会える最後になるかもしれないと酒を「旋風にむかつかけた」。さらに「許は自分も一杯飲み、さらに、旋風へ酒を呈上した。五六回そうすると、これまでまっすぐに立っていた旋風が、右に左にゆれはじめ」た。旋風は「酔っぱらったのである」。

許が酌んであげた酒は強烈なカストリで、柄杓一杯どころか、半分のもでも三日酔いで頭のあがらぬ代物。それを五六杯のませたのだから、旋風が泥酔したのも無理はない。（27頁）

こうして「へべれけになった王六郎は、もうなんの見さかいいない」。「そこら中のもを手あたり次第に巻きあげ吹きたおす荒々しさで、暴れまわりはじめた。（中略）林も、家も、人も、車も、絹も、金も、酒壺も、酔いどれ旋風に巻きあげられ、叩きつけられた」のである。そこに、李花蓮が乞食のようになってやってきた。李花蓮は許を追ってきたのであった。李花蓮は「ああ、神さま、お助けください」と叫んで逃げようとしたが、「母と赤ん坊とは、旋風の圏内に巻きこまれた。」そして物語の

最後は、

狂暴無残となった大旋風は、車も、人も、荷も、家も、草も、花も、すべてのものを渦巻のなかにまきこみ、ごうごうと音たてて回転しながら、一団となって、近くに濁流はとばしる揚子江の川面へ落下して行ったのである。(28頁)

以上が、火野の「王六郎」の展開である。先にも記したが、本作には戦後の風俗が書かれている。許の道楽の仕方を「新興成金のやうな凱旋ぶり」と戦後の日本に誕生した成金に譬える。そして、許は「パンパン・ガールでもよい」と、主に戦後在日米軍将校を相手にした街頭娼婦を追い求めるのである。さらに第二次世界大戦終戦直後の日本で出回った、粗悪な密造焼酎の俗称、カストリを王六郎に飲ませて悪酔いさせてしまう。そこで、許も、街も、許を追ってきたいわゆる「共產主義」にどっぷりつかった愛人李花蓮も、王六郎の巻き起こした旋風で壊されてしまう。その結果、何もかもなくなってしまふのである。

五、火野葦平「王六郎」に込められたテーマ

さて、これまで考察してきたように、火野「王六郎」では、許は戦後の混乱の中、うまく世渡りした新興成金と設定され、「酒と女とはくちを好む」性質で、粗悪なカストリ酒を持ち、パンパン・ガールを追い求め、道楽頹廢の限りを尽くす。なんとも情けない、だらしのない人間である。さらに許は、「嘘やごまかしのいえぬ好人物」ではあるが、依存的な男で、「怠惰で、不勉強」で日和見、御都合主義者の「オポチュニスト」とされ、欲深く、身勝手である。その上許はどうも、戦争を経験していて、許の依存心は軍や政府の庇護が必ず自分を守ってくれると思いついていた時からのもので、戦争の時の影を、戦後の今になつてもまだ引きずっている。さらに、勝手に浮気をして李花蓮と言う愛人をつくり、婚外子までもうけながらも、平気で李花蓮を捨てようとし、死んでほしいとまで切望する無責任極まりない男である。

一方、許の妻黄英も、欲の塊で儲けることばかり考え、嫉妬深くエゴイストである。許の愛人李花蓮も肅清を繰り返す、世にも恐ろしい当時の共産党の「赤」にどっぷりつかった女であり、妻と同じように強欲で他人の自由を奪う。つまり、許もそ

の妻も愛人も、戦後にはびこつたろくでもない連中なのである。そんな者たちを、正直で徳の高い土地神の王六郎が、風で旋風を巻き起こして破壊し、とうとう無にしてしまふところで火野の「王六郎」は終わる。決して、戦後にのさばっていた、非道徳的な者たちをそのままにしてハッピーエンドには終わらせない。そこには、痛烈な日本の戦後批判が込められている。

さて、なぜ本作はラスト全て、無にしてしまうのであろうか。本作には、戦後の風俗が背景にあることは指摘したとおりである。戦後とは、どのような時代か。戦後は「戦時中の抑圧されたエネルギーがマグマのように一気に噴き出したのだらう。戦後の出版自由化の流れの中で、雨後の竹の子のように次々と出版されたのが『カストリ雑誌』だった」とある。このように、戦時色一色で、肉体、性に禁欲的であった人間たちの欲望が、戦後一挙に燃え上がった時期である。カストリ雑誌は、『りべらる』（一九四六年一月創刊）を皮切りに、『美貌』（一九四六年一〇月創刊）『犯罪読物』（一九四七年三月創刊）『実話ロマンス』（一九四八年二月創刊）など、戦後まもなく夥しく発刊された。「表紙には官能的な女性の絵。ページを開くと、ポルノ小説や性的興奮をあおる記事、赤裸々な性生活の告白や猟奇的な事件のルポなどが載っていた」¹¹戦後の人々は、肉体に憧れ、

性の解放と共に乱倫な状態に陥っていた。火野は、このような当時の風潮をふまえ「肉体を過信することは危険である。肉体は思考などしない。精神の高貴が追及されなくては肉体は腐屍である」「エロチシズムのみが文学となり得ることはできない」¹²と警告する。さらに火野は、「自由の意味にも警戒をする。人間の自由とは単なる肉体の自由ではない。」「人間の救ひも単に肉体のなかのみは求められない。精神の問題のないところに、肉体の苦悩も浄化もあり得ないのである」と、精神の高貴さにこそ救いがあると続ける。戦後の頹廢的な世の中で、許は肉体に溺れ、利得を追及して新興成金になり、自分の本能のままに生きた。妻も、李蓮花も同じように道徳心のかけらもない。戦後、肉体は開放された。すると墮落しつづけ、本能のままに生きる社会や人間が生まれた。そんな人間たちを一度リセットさせようと考へ、王六郎の風で無にしてしまったのかもしれない。この作品のラストは、坂口安吾が戦後まもなく著わした「墮落論」（『新潮』一九四六年四月）にも通ずるところがある。安吾は「墮落論」で、「終戦後、我々はあらゆる自由を許されたが、人はあらゆる自由を許されたとき、自らの不可解な限定とその不自由に気づくであらう。」「人間は墮落する。」「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はな

い。」と述べる。続けて安吾は、

人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。そして人の如くに日本も亦墮ちることが必要であろう。墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。

と記している。安吾は、あらゆる自由は、不自由でもあるとし、墮ちきるところから、自分で自覚し、自身を発見していくことが救いにつながると述べている。

火野「王六郎」でも、許や李花蓮のように欲望の赴くままの自由を謳歌すれば、かえって不自由になり、もはや墮ちるしかなかった。そして、墮ちきった許、李花蓮などは、王六郎の神風で一掃され無くなった。戦争の影を引きずり、依存していくのをやめて、自分自身で自立し、考えていくことが、墮ちきった許や李花蓮らの救いである。そうすることにより敗戦で何もなるところからの戦後の本当の再出発ができるのである。ゼロから、許や李花蓮のような墮落した人々が再出発することを暗示して、ラストは無にしたのだろう。

終わりに

本稿では、火野のおよそ一〇作の『聊齋志異』関連作品の中から、「王六郎」をとりあげ、典拠『聊齋志異』『王六郎』と比較することで、火野の改作の様相や、作品のテーマについて考察してきた。火野の「王六郎」は、『聊齋志異』『王六郎』を改変し、語り手を配し、典拠にはなかった内容を組み込んでいる。火野の「王六郎」には、戦後すぐの頹廢した風俗や新興成金、爾清を繰り返す共産党への批判が記され、人間が、高貴な精神性を持つことの重要性が描かれていた。「王六郎」が執筆された一九四九年には、戦前の禁欲的な状況から解放され、無秩序な自由を謳歌する人間が数多くいた。火野は、「精神の高貴が追及されなくては肉体は腐屍である」と述べるが、欲望に溺れ、思考しない人間の末路を、作中にあるように、破壊し、無にしたのであった。

火野のおよそ一〇作の『聊齋志異』改変作品は、そのほとんどが、公職追放中に描かれた。火野自身も、公職追放中に「私は窮して、救いを『聊齋志異』に求めた¹⁵⁾」と述べる。火野は、公職追放中に、戦争で失敗した日本人が、戦後、再出発するにはどうすればいいかという問題を突き詰め、『聊齋志異』から

救いのヒントを得たのである。『聊齋志異』では、幸せになるのは、仁徳の高い人物である。精神の高貴さがなければ決して幸せにはならない。火野の「王六郎」には、精神の高貴さへの必要性、そして、依存することをやめて、自らの力で思考し、救いを見つけることの重要性が暗示されている。そしてそれが、戦後の救いをもたらすのであり、再出発への知恵なのだ。

〔注〕

(1) 大庭脩『江戸時代における唐船持渡書の研究』(一九六七年三月、関西大学東西学術研究所) 参照

(2) 佐藤春夫『玉簪花』(一九三三年八月、新潮社)

(3) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異(一九五五年七月、学風書院)

(4) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異 同

(5) 本書には民国としか奥付が記載されていないが、関西大学図書館を通じて、レファレンス協同データベースに問い合わせてもらった。広告に一九二〇年代のものが記されているので、おそらく一九二五年以前のものともみて間違いはないとの回答を得た。

(6) 『美女と妖怪』私版 聊齋志異 同

(7) アーチ・ゲッティ・オレグ・V・ナウーモフ編『ソ連極

秘資料集 大粛清への道』(二〇〇一年一〇月、大月書店) 参

照

(8) 火野葦平「三十年愛読の書」(『底本聊齋志異月報三』一九五五年八月、修道社)

(9) 火野葦平展運営委員会編『火野葦平展』(平成六年一月、北九州市教育委員会)

(10) 小泉信二「小泉信一の裏昭和史探検その10カストリ雑誌」(『週刊朝日』二〇一六年二月二日)

(11) 同右

(12) 火野葦平「あとがき」(『悲恋』昭和二四年七月、洋元書房)

(13) 同右

(14) 同右

(15) 火野葦平「三十年愛読の書」同

(ますだ ちかこ／本学教授)